

徳島県立博物館



ナルトサワギク

ナルトサワギクは1976年に鳴門市瀬戸町で見つかった帰化植物です。埋め立て地の緑化の種子に混じって広がったものですが、花の特徴からサワギク属の一種であることがわかりましたので、ナルトサワギクと名付けられました。しかし、サワギク属は世界で2000種を越えるといわれており、その学名はわからないままになっていました。学名がわからないと、この植物がもとどこに生えていて、どんな植物で、どのように広がっているのかといった正体を調べることができません。

その後、ナルトサワギクの学名が幾度か発表されましたが、どれも確証に欠けていました。ところが、1996年に、徳島県立博物館に収蔵されていたアルゼンチン産の標本の中にナルトサワギクと同じものが見いだされました。そのラベル

には *Senecio. madagascariensis* Poiret という学名が書かれていました。また、徳島県植物研究会の会長である木下覚氏が、アメリカのスミソニアン博物館にナルトサワギクの標本を送り同定を依頼していたところ、1997年に同博物館の Harold Robinson 博士からその結果が戻ってきて、それも *S. madagascariensis* と同定されていました。さらに、同博物館に滞在中の富山市科学文化センターの太田道人氏により、多くの情報が寄せられました。こうして、発見から20年以上たって、ナルトサワギクの学名が *S. madagascariensis* ということが明らかとなり、インターネットなどを通じてその情報が集まるようになりました。

毎年、たくさんの生き物が外国から入ってきますが、その正体をさぐるのはとても難しいことなのです。
(小川 誠)

鳴門海峡海底の化石

中尾 賢一

はじめに

鳴門海峡は鳴門市と兵庫県淡路島^{はりまなだ}の間に位置しています(図1)。海峡北西側の播磨灘と南西側



図1：鳴門側から見た鳴門海峡

の紀伊水道との間に大きな潮位差ができることで、有名な「鳴門の渦潮」が発生します。その潮位差は最大1m以上、潮流の速度は最大毎秒5mに達します。海峡両側の海底には、溝状の凹地や海釜とよばれるくぼ地が発達しています。潮流が海底を深くえぐってできた地形です。

鳴門海峡海底の化石 - その産出状況

鳴門海峡周辺の海底からは、ときどきナウマンゾウなどの化石^{そごびきあみ}が底曳網の漁網にかかります(図2)。化石が引き上げられる場所は海釜の周辺な



図2：鳴門海峡の位置と化石産出地点（赤い丸印）

ので、もともと海底下の地層の中に含まれていたものが潮流によって洗い出されたものだと考えられています。南淡町福良沖(紀伊水道側)では最近10数年間、化石はほとんど採集されていないそうですが、淡路島南西海域(播磨灘)では現在も新たな化石が得られています。それでも20年前と比べると大型のものが減り、化石の数も少なくなりました。

私はこれらの化石をいろいろな面から調べています。特にこの1年間ほどの間には、いろいろな方のご協力をいただいて資料や情報の蓄積が急速に進みました。これまで不明だったいくつかの点を明らかにすることができただけでなく、新たな課題も出てきました。ここでご紹介するのはその成果の一部です。まず鳴門海峡の地質や化石について概説し、代表的な化石であるナウマンゾウとトウキョウホタテについてやや詳しく解説します。

化石の種類と年代

鳴門海峡海底産の化石は、大型の陸生哺乳類^{りくせいほにゅうるい}と、貝やフジツボなどの海生無脊椎動物^{かいせいむせきういどうぶつ}の2つのグループに分けることができます。

よく知られているのは陸生哺乳類の方で、数量的にもこちらが多数派です。紀伊水道側と播磨灘側の両方で見つかっています。圧倒的に多いのはナウマンゾウ(図3)で、しかもこれ以外のゾウは報告されていません。ナウマンゾウ以外にはシカの角なども見つかっています。これらの化石は、かつて瀬戸内海が干上がって陸地になっていた時代があり、そこにたくさんのナウマンゾウやシカが住んでいたことを示しています。

海生無脊椎動物化石は、現在のところ播磨灘側の淡路島南西海域でわりあい多く見つかっていますが、紀伊水道側では未発見のようです。現生の貝殻と識別が難しいので、ほとんどの場合、引きあげられても気づかれないことが多いでしょう。

最も目立つのは絶滅種のトウキョウホタテ(図4)で、これ以外に、大型のフジツボやトリガイなどが得られています。

これらの化石の詳しい年代は不明ですが、ともに中期～後期更新世のものであることは確かでしょう。ナウマンゾウとトウキョウホタテが全く同じ時代の化石だとは考えられませんが、どちらが古いのかはわかっていません。

ナウマンゾウ

日本列島で最も多く発見されるゾウです。当館の常設展示室には、北海道忠類村産の全身骨格が展示されています。生息していた時代は約40万～2万年前(第四紀更新世中期～後期)で、北海道から九州までの各地で化石が見つかっています。

化石が多く見つかる場所が全国にはいくつかあります。その中の備讃瀬戸海域(香川県坂出市沖～岡山県倉敷市の間)、釈迦ヶ鼻沖(小豆島南方海域)と野尻湖(長野県北部)の3地域では多数の標本が集められていて、個々の標本の計測値を含む詳しい報告が行われています。

当館に収蔵されている鳴門海峡産第3大白歯の標本について、これらの産地の計測データと比べたところ、鳴門海峡産のものは全体的に野尻湖産のものより小さいことがわかりました。微妙ではありますが、ちょっとした形の違いもありそうです。その一方、同じ瀬戸内海の産地である備讃瀬戸産と釈迦ヶ鼻沖産のものについては、何かしら違いはありそうなのですが、はっきりした結果が出ませんでした。同じ瀬戸内海ということで、野尻湖のものとは比べると違いが少ないのかもしれませんが。

今のところ鳴門海峡産の標本は数が少なく、そ



図3: 頬側からみたナウマンゾウ右下顎第3大白歯

の特徴についてもこれ以上詳しいことはわかっていません。今後、標本やデータが増えれば、他産地のナウマンゾウとの違いがよりはっきりしてくるだろうと考えています。

トウキョウホタテ

日本各地の鮮新世～更新世の地層から産出し、特に関東地方の中期更新世の地層から多産することでも有名です。ホタテガイとよく似ていて、大きさも同じくらいです。時代や産地により、形態や大きさにいくらかの違いがあります。

最近まで鳴門海峡海底産のトウキョウホタテは



図4: トウキョウホタテ左殻、非常に保存がよい標本

標本数が少なく、研究者の間でも存在がほとんど知られていませんでした。ところがこの数年間に漁師の小野守さん(鳴門市瀬戸町)が10点ほどの化石を採集し、そのすべてを博物館に寄贈していただいたので、ようやく詳しい検討が開始できるようになりました。

鳴門のものは、左殻が平らで右殻がよくふくらむ傾向があるようです。母岩付きのものは、青っぽい泥岩の中に含まれています。大型のフジツボやイタボガキと同じ岩塊に含まれていることもあります。二枚の殻が両方そろった個体が多いのも特徴のひとつです。片殻のものも多くは、地層から洗い出されたときやその直後に壊れてしまう、ということなのかもしれません。このような形態上の特徴や産出状況などを、今後詳しく調べる予定です。(地学担当: 主任学芸員)

前山古墳群は名西郡石井町、県道石井神山線の石井側からの登り口の南側山頂部付近にあります。2つの古墳が並んでおり標高は約160mほどです。

博物館では、平成7年度から継続的な調査を行っています。平成10年度には、前山1号墳の墳丘の大きさの確認を目的とする発掘調査に取りかかり、平成11年度は埋葬主体部である後円部のたてあなしきせきしつ竪穴式石室の形態と副葬品の確認のための発掘調査を行いました。また、後円部の墳丘の南斜面で墳形確認のための補足的な調査を行いました。

埋葬主体部は、すでに盗掘を受けている、石室内の観察から、竪穴式石室の中に箱形石棺はこがたせつかんを持つタイプだと考えられていました。

平成11年度の調査では、石室の床面まで掘り下げましたが、北寄りについては、盗掘によってかなり破壊されており、床の構造などは不明でした(図1)。

埋葬主体部は、後円部のやや前方部寄りに設けられており、前方部側と後円部の中央付近の墓壇ぼこうの掘り込みと思われる部分に沿って、板状の緑色片岩が南北に並んで立っています。

床には赤みの強い粘土を敷いてその上に割竹形木棺わりだけかたもっかんを据え、東西両側に板状の緑色片岩りよくしよくへんがんを並べ、その側板に接するように竪穴式石室を築いていました。調査前に箱形石棺と考えていたのは木棺を囲った板状の緑色片岩でした。石室は南北に細長く長さ約3.1m、幅は北側で約1m、南側で約0.8mで、石室の南壁は緑色片岩の一枚板です(図2)。



図1 後円部調査風景 - 見学者への説明

中央より東にはやや小ぶりの緑色片岩の割石が積まれています。主体部が西に偏っていることから、東側にもう一つ石室がある可能性があります。

石室からは遺物はほとんど出土しませんでした。後円部平坦面トレンチの東寄り中央付近で土



図2 竪穴式石室の南壁

師器壺のやや大きな破片がまとまって出土しました。器形は単純な口縁の広口壺のようです。

後円部墳丘については、南側は昨年調査した東側、北側と異なり全面が緑色片岩の葺き石すそに覆われていたようです。裾の部分の葺き石は小口積みされ上半では平積みされています(図3)。

石室の構造、後円部墳丘の形態、東側の石室の有無をはっきりさせるためには、後円部全体にわたって断ち割を入れなければなりません。これらの検討を通して古墳の年代は明らかになることでしょう。(考古担当：高島芳弘)



図3 後円部墳丘南斜面の葺き石

数年前に、日本には生息していないセアカゴケグモが関西地方で見つかり、毒グモ騒ぎがおこったのは記憶に新しいところです。また、20年も前に見つかったナルトサワギクの正体が、ようやく明らかになりました。四国には分布していないイワヨモギやキクタニギクが剣山スーパー林道で出現するようになり、道路ののり面の緑化のためにふきつけた外国産の種子にまじっていたことがわかってきました。

こうした、我々人間の活動にともなって外国からやってきて、もともとの生育地とは違う場所で広がっている生きものがたくさんみられます。なかには日本の風景にすっかりとけ込んでしまったものもあります。また、最近の釣りブームによって、外国産の魚が放流され、もともとあった生態系に影響をあたえている例もみられます。今回の企画展では、^{すがお}^{なが}そうした侵入者たちにスポットをあて、その素顔を眺めてみます。

おもな展示品

セアカゴケグモ、ジャンボタニシ、アメリカザリガニ、ブルーギル、オオクチバス、ブタクサハムシ、キクタニギク、イワヨモギ、ナルトサワギク



見慣れた風景になっている外国からやってきた生きもの
(上：ホテイアオイ、下：ヒガンバナ)



キクタニギク

会 期 7月18日(火)～9月10日(日)
月曜休館
会 場 博物館企画展示室
観覧料 一般 200円 / 高校・大学生 100円
/ 小・中学生 50円
(20名以上の団体は2割引)

関連行事

(1) 帰化生物を探そう

日 時 7月30日(日) 13:00～16:00
会 場 小松島港周辺
講 師 大阪追手門大学教授 西川嘉朗氏
(日本蜘蛛学会会長)

(2) 展示解説

日 時 7月23日(日)および8月6日(日)
14時～15時
会 場 博物館企画展示室(観覧料必要)
講 師 当館学芸員

館蔵品紹介 むすめがしら 初代天狗久作娘頭・初代天狗久関係写真

初代天狗久は、阿波でもっとも名の知られた人形師です。安政5(1858)年に生まれ、明治6(1873)年に16歳で弟子入りして以来、昭和18(1943)年86歳でなくなるまで、70年余の間、一筋に人形頭の製作に打ち込みました。数多く残された美しい頭はいうまでもなく、人形一筋に打ち込む初代天狗久、その人の生きざまでもが、多くの人を魅了したようです。特に、作家宇野千代が、天狗久をモデルに「人形師天狗屋久吉」をあらわしたことはよく知られています。

さて、ここで紹介する資料もまた、天狗久その人にひかれた人物があったことを示すものです。これら資料は、昨年12月末に、日本画家・故野島青茲氏(1915-71)の長女野島直子氏から「天狗久の故郷徳島で役立ててくださいと」寄贈されたものです。

野島画伯は、数多くの作品を残し、昭和19(1944)年から24(1949)年に法隆寺金堂壁画模写に従事するなどの高名な日本画家です。

調べたところ、野島画伯は昭和17(1942)年、天狗久の工房に訪問、滞在しており、初代天狗久の姿や、工房の様子をスケッチなどを行っていたようです。それを基にした作品「工房」が昭和18



図1 野島画伯が初代天狗久から譲りうけた娘頭



図2.3 初代天狗久をスケッチする野島画伯

(1943)年に第六回新文展に出品されています。

寄贈された資料のうち、娘頭は、野島画伯が天狗久の工房を訪れた際に、初代天狗久から譲りうけたものです。明治32年の墨書があり、「義経千本桜」のお里、もしくは「新版歌祭文」のお光であると考えられます。また、写真の方には、野島画伯が天狗久をスケッチしている場面などがあり、訪問当時の初代天狗久や工房の様子がわかります。



図4 野島画伯が撮影したと考えられる初代天狗久の手

これらは、初代天狗久の交友関係や人となりをより詳しく知るための貴重な資料となりそうです。(民俗担当：庄武憲子)

蜂須賀家では、御家騒動はなかったのですか？

蜂須賀家では、江戸時代の初期に大きな御家騒動が発生しました。御家騒動は、江戸時代、大名の相続争いや家臣の権力争いなどが原因で発生した藩内の大きな騒動を言います。もちろん、御家騒動は、徳川将軍家などにも発生しましたが、ふつう、御家騒動と言えば、大名家の大きな騒動を指します。有名なものでは、家臣間の大きな権力争いに発展した仙台藩の伊達騒動、家督の相続をめぐる陰謀事件にまで発展した金沢藩の加賀騒動などがあります。一方、大名家の中で、御家騒動と呼ばれた大きな騒動にまで発展しないままで終わった騒動も数多く存在しました。

御家騒動の原因や性格は、時代によって大きな違いがあります。初期の御家騒動は、関ヶ原合戦以降、徳川家に属した外様大名に多いことが特徴です。これらの大名では、戦国時代の戦の体制から、平和時の幕藩体制に移行する過程で発生した新・旧家臣間の対立による御家騒動があります。これは戦の世を生き抜き、幕藩体制の基礎を築き上げた軍事に秀でた重臣と、幕藩体制のなかで新しい時代に立ち向かおうとした官僚的な家臣との対立という形がみられます。中期の御家騒動は、関ヶ原合戦以前から徳川家に属した譜代大名に多く発生しました。これらの大名では、家督相続と家臣との権力争いが複雑にからみ、家臣間の対立が表面化しました。

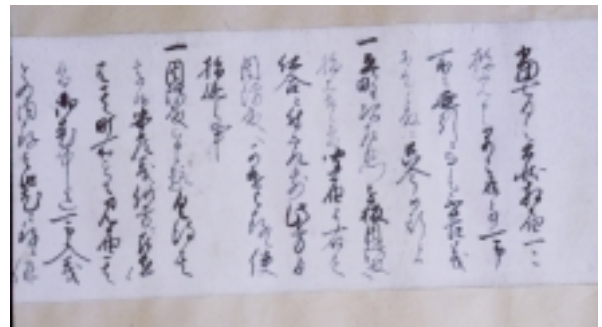
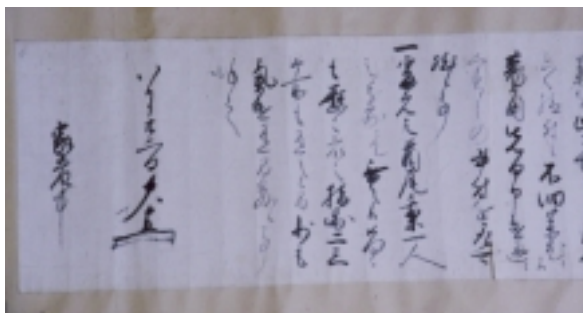
さて、阿波・淡路の2国を支配した有力な外様大名であった蜂須賀家では、どのような御家騒動が起こったのでしょうか？

1633年（寛永10）徳島藩の役人によって、家老の益田豊後長行（7,000石）の不正が摘発され、その結果、豊後は家老職と領地を没収され、投獄

される事件が起きました。益田家は、蜂須賀家と姻戚関係にあり、正勝・家政に古くから仕えた重臣で、大きな権力を持った家老でした。豊後は私腹を肥やすため、自分の領地であった海部郡の農民に重い年貢を要求しました。そのため、100人近い農民が土佐国に逃げ込むという、きわめて大きな騒動に発展しました。そのため、豊後は責任を問われ、13年間にわたって神山の牢獄に繋がれました。しかし、豊後は自分に対する処罰を恨み、義弟を利用して、幕府に蜂須賀家の不正を訴えました。その不正とは、幕府が禁止した大船の建造、キリシタン疑惑の未調査、幕府への謀反という、きわめて重大なものでした。この3点は、いずれも大名を統制した法律である武家諸法度に大きく違反するものでした。このことが事実であれば、蜂須賀家は幕府からただちに取りつぶされる運命にありました。蜂須賀家では、例のない最大の危機を乗り切るため、若い2代藩主・忠英を中心に、対策が練られました。ちょうどこの時、参勤交代のため江戸にいた忠英は、国もとの家老6人に対して、細かい指示をあたえた書状が当館に所蔵されています。

事件は、結局、幕府の裁定で豊後の訴えはすべて退けられ、蜂須賀家の全面的な勝利で決着しました。この事件は、蜂須賀家との姻戚関係をバックに、権力を乱用した家老と、幕藩体制のなかで新しい時代に立ち向かおうとした官僚的な家老の長谷川越前貞恒との激しい対立が原因でした。幕府でもこの事件を大きく重視し、『徳川実紀』に裁決のようすを記録しています。この騒動は、一般に「益田豊後事件」と呼ばれていますが、蜂須賀家を代表する最大の御家騒動でした。

（歴史担当：山川浩實）



二代徳島藩主忠英の書状、巻頭部（右）、巻末部（左）

